

おおぼかめ先生

上崎美恵子・作 渡辺有一・絵



こども文学館 18

定価 780円

おおばかめ先生

1980年11月 第1刷

著 者 上 崎 美 恵 子 (こうざき みえこ)
画 家 渡 辺 有 一 (わたなべ ゆういち)
発行者 久 保 田 忠 夫
発行所 株式会社 ポ プ ラ 社
〒160 東京都新宿区須賀町 5
振替東京 4 - 149271
印 刷 富士美術印刷株式会社
製 本 石 毛 製 本 株 式 会 社

落丁本、乱丁本はおとりかえいたします。

NDC 913/158P/22cm 8093-095018-7764

Printed in Japan

©上崎美恵子 渡辺有一 1980

おおばかめ先生

上崎美恵子・作 渡辺有一・絵



はじめに

もしも もしも……

はなれ小島^{こじま}に とりのこされたら

あなたは いったい どうするかしら

水をさがして 食べものをさがして

それから すまいや 着るものも……

そのほかに とても だいじな

なにかを あなたは さがすはず……



おおばかめ先生／もくじ

1	ファン・レター	8
2	ロープウェイ	31
3	アイスクリーム	56
4	絵のすきな犬	72
5	ウノカシラ公園	95
6	子どもは悪魔か？	108
7	幸福の島	118
8	まわる観覧車	149
	あとがき	157







▶作家・上崎美恵子（こうざき みえこ）

福島県二本松市に生まれる。六歳の時，上京し青山学院大学に学ぶ。宮沢賢治の童話にふれて感激，児童文学を志す。「まほうのペンチ」（ポプラ社）「ちゃぶちやつぶんの話」（旺文社）により赤い鳥文学賞を受賞。主な著書に「とらとらねこちゃん」（理論社）「うたうせんめんき」（講談社）など多数ある。

現住所 保谷市住吉 6-15-16

▶画家・渡辺有一（わたなべ ゆういち）

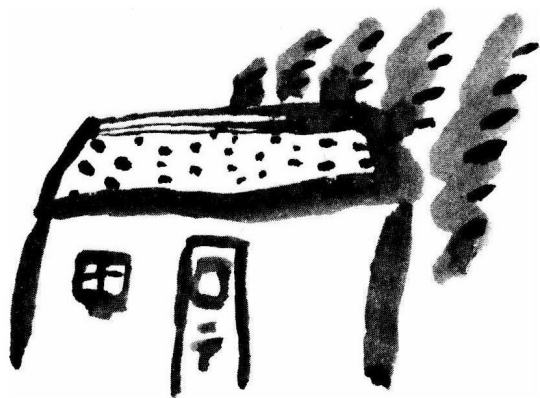
1943年，旧満州に生まれる。日本デザインスクール，武蔵野美術短期大学に学ぶ。絵本，さし絵の世界で活躍。主な絵本に「たろうとつばき」「たまたまのめだまやき」（いずれもポプラ社）近作に「ぼくらの甲子園」（ポプラ社）がある。

おおばかめ先生

上崎美恵子・作 渡辺有一・絵



Ⅰ ファン・レター



ファン・レターをもらうなんて、大場カメ先生
にとっては、はじめての経験だった。

だから、ほんとにびっくりしたのだ。

大場カメ先生は大学にいたころ、しゅみとして、
ある絵画研究所にかよった。そして、絵のみりよ
くのとりこになってしまった。

大学を卒業すると、いちじは商事会社につとめ
たのだが、半年ほどでやめてしまつて、それから
は、ひたすら絵をかきつづけた。

そして、審査がきびしいことで有名なニカニカ
展に、毎年、春と秋に応募しているが、いちども
入選できないまま、十年ちかくたつてしまった。
「絵をかくことだけが人生じゃないわ。はやく結
婚しちゃいなさい！」

と、とうに結婚して子どもがふたりもいる、大学時代の親友がいうが、

「とにかくニカニカ展に入選してからよ。」

と、がんばっている。

（見てらっしゃい！ いまに日本じゅうに、いいえ、世界に名を知られる画家になつてみせるわ。）

と、いくぶん意地になつているところもある。

土曜と日曜をのぞく午後は、研究所にいたころの先ぱいがひらいている絵画教室をつだつて、子どもたちに絵のしどうをしている。

そのほかに広告社からたのまれて、マツチのレッテルや、せんでんビラの絵などもかく。その収入でなんとか生活できるので、しずかな住宅街にある二DKの小さな家で、ひとりであらしている。なくなつた両親がのこしてくれた古い家だ。十畳の洋間をアトリエにして、六畳の和室、それに五畳ほどのダイニング・キッチンがついている。アトリエのかべには、かきためた絵がずらりとならんでいる。

ほとんどがニカニカ展に応募して落選した絵だ。どうして落選したのかわからないほど

よくできていると思うので、みんなかざつてある。

アトリエのかべは、そんなわけでにぎやかだが、家の中にはかざりらしいものが、ほんとにすくない。

絵画^{かいが}ひとすじにうちこんできて、ほかに、しゅみもない大場^{おおば}カメ先生の家は、まったくさつぷうけいだ。玄関^{げんかん}のドライ・フラワーもほこりをかぶっているし、門のまわりには雑^{ざう}草^{そう}がしげっている。

食事のしたくもめんどうなので、朝は牛乳^{ぎゅうにゅう}にトースト、昼はカップラーメン、夜は肉と野菜のいためものがおい。近所の人におじぎをするのもわずらわしいので、なるべく人と顔があわないうようにしている。それで、近所の奥^{おく}さんたちからは、

「あの人、かわりものよ、お高くとまって……」

と、かげ口をきかれているが、そんなことは気にしないことにしている。世間^{せけん}に名を知られる画家^{がが}になつてしまえば、かげ口なんてしぜんにきえてしまうにきまつている。

ことしも、春のニカニカ展^{てん}をめざして制作^{せいさく}をはじめた。

こんどの応募^{おうぼ}作品^{さくひん}の題^{だい}は『かごの中のカラス』とつけるつもりだ。毎日^{まいにち}、かごの中のカ

ラスとにらめっこして絵筆をはこんでいたが、そんなある日、一通のハガキが大場カメ先生おおばの家にまいこんだのだった。

『がんばれ、がんばれ、おおばかめ！』

という文面で、さし出し人の名前はない。『おおばかめ！』なんて、よびすてにされて、みよな気もしたが、ファン・レターというものはそんなものかもしれない。

「そうよ、ルノアールも、ピカソもシャガールもね。」

えらい画家がはみんな名前をよびすてにされている。大場カメ先生おおばは、いよいよ有名画家ゆうめいがに仲間入りなかまいできる日がちかくなったような気さえしてきた。

名前のよびすては、そんなわけで気にならなかったが、『大場カメ』という自分の名前には、生まれてから何千回目かのため息いきがでてしまう。

大場カメ先生のおばあさんは大場ツルといった。

おばあさんは、はじめての孫まきには、自分が名前をつけるといって、カメという名前をえらんだ。

「あたしはツルという名前のおかげで、この年までしあわせだったからね。カメという名前も、ツルとおなじにえんぎがいいよ。」

両親は猛反対したが、がんこもののおばあさんにおしきられてしまった。

けれども大場カメ先生にとつて、この名前はすこしもえんぎがいいとは思えなかった。えんぎがよかつたら、もつとはやくニカニカ展に入選しているはずだ。それに子どものころは、この名前のおかげで、ずいぶんいやな思いをした。

「おおばかめ」と、はやしたてられて、どんなにくやしかつたかしのれない。意地のわるい男の子に、いつも石をぶつけてやった。そのせいで、いまのように気がつよくなつてしまったのかもしれない。

『がんばれ、がんばれ、おおばかめ！』

ハガキにこんなもんくがかいてあるファン・レターをもらつて、大場カメ先生は、もつとすてきな名前だったら……と、ちよつぴりなさけなかった。

けれども、なにしろ生まれてはじめてのファン・レターだから、いそいそと、ハガキをアトリエのかべにビニール・テープでとめた。

そうして、カンバスにむかった。

「カーア、カーア。」

かごの中のカラスがないた。

「しずかに……、もうすこしだから、じっとして……」

大場^{おおば}カメ先生がそういったのに、カラスは首^{くび}をのぼしたりちぢめたりして、「カーア、カーア」とさわいだ。

「こら、じっとして！」

絵筆^{えびし}の先で、大場カメ先生はカラスのかごを、とん！ とたたいた。

「そんなにうごきまわらないで！ あんたはモデルなんだから……。おとなしくしてないところあげないわよ。」

ようやくしずかになったカラスを見ながら、大場カメ先生は制作^{せいさく}をつづけた。

生まれてはじめてファン・レターをもらったせい、心がはずんで仕事^{しごと}がおどろくほどはかどった。

『がんばれ、がんばれ、おおばかめ！』

よく日^{じつ}、にどめのファン・レターがきたときも、大場^{おおば}カメ先生はやはりうれしかった。きのうのハガキとおなじきれいな字で、やはりさし出し人の名前はなかった。

ひとりで、こつこつ絵をかいている自分をばげましてくるファンが、どこかにいるのだ。

なんて、ありがたいのだろう。

大場カメ先生はにどめのファン・レターも、いちどめのファン・レターのとなりにビニール・テープでとめようとした。

そのとき、ハガキのあて名のほうを見てハッとした。

「あらっ、住所がかいてない！」

『おおばかめさま』と、あて名はあつたが住所はなかった。

いそいでいちどめのハガキをしらべた。

「あーら、こつちも！」

いちどめのハガキも、『おおばかめさま』とあるだけで住所がしるしてない。

「どこのポストにいったのかしら……」

スタンプをしらべようとして、大場^{おおば}カメ先生はまた、

「あーら。」

と、いった。けし印^{いん}がなかったのだ。

どうして、こんなハガキが自分のところへとどいたのだろう。

大場カメ先生はしばらく二枚^{まい}のハガキをながめていた。

「カアーオ、カアーオ。」

かごのクラスがまた、さわいだ。

「しずかにして……。いま、考えてるんだから……」

でも、クラスはうるさくなきたてで、つばさをばさばさせた。

「うるさいわね！ 絵が完成^{かんせい}したらはなしてやるんだから、おとなしくして！」

大場カメ先生が、かごを、とん！ とたたくと、どうやらしずかになったが、とまり木の上で首^{くび}をきよときようごかして、ひどく落ちつきがない。

「どうしたの？ えさは、ちゃんとやってあるのに……」